

徳島小松島港長期構想検討委員会 第1回委員会・幹事会 議事概要

1. 開催日時 令和8年7月8日（水）9：30～12：00
2. 開催場所 徳島グランヴィリオホテル グランヴィリオホール
3. 出席委員 出席者名簿のとおり
4. 議事
 - 1) 徳島小松島港の現状と課題等について
 - 2) 意見交換
 - 3) その他
5. 議事要旨
 - 1) 開会
 - 2) 委員・幹事紹介
 - 3) 委員会設置要綱
 - 4) 委員長選任
 - 5) 議事
 - ①徳島小松島港の現状と課題等について
事務局から資料説明

②意見交換

委員区分	主要な意見
港湾関係者	・ 港単体ではなく、中心市街地の活性化協議会等と連携し、港周辺を含めた一体的な活性化を進めていただきたい。 ・ クルーズ船専用岸壁やターミナルがないため、近隣の高知港等と比べて寄港数に大きな差が開いており、競争力強化が必要。また、鳴門の観光地へ向かう際、港からの公共交通機関が不便であり、乗客が個人で移動するにはハードルが高いため、アクセスの向上が求められる。沖洲や津田地区などに大型クルーズ船専用の岸壁やターミナルを整備してほしい。 ・ 小松島新港岸壁は、給水設備があるなど休憩岸壁として好評であり、今後はアイドリングストップによるCO2削減につながる「陸上電源設備」の設置を要望する。 ・ 赤石地区について、-13m岸壁の延長工事を当初計画どおり完成させること、-10m岸壁と-7.5m岸壁を接続すること、コンテナヤード背後の水面貯木場を埋め立てして倉庫等の用地に活用すること、軟弱地盤上で傾斜が生じている現コンテナヤードを強化して本格的なコンテナヤードとして整備することを要望。

港湾関係者	・津田地区について、岸壁(-10m)の老朽化対策と船舶の大型化に伴う岸壁の拡張が必要。また、将来的な水面貯木場の埋め立てや新埠頭の建設、クルーズ船の専用岸壁としての活用も検討してほしい。 ・将来的に、交通利便性の高い津田地区をコンテナ拠点として活用する選択肢も併せて検討していただきたい。 ・広範囲にわたる徳島小松島港において、各エリアの機能（役割）を明確にし、点在する各エリアを繋げて相乗効果を生み出す「回遊の仕組みづくり」が賑わい創出の鍵となる。 ・港湾単体の計画にとどまらず、徳島市や小松島市のまちづくり計画と連動させた広域なゾーニングやビジョン策定をお願いしたい。 ・海面の利用や漁業環境への影響について十分に配慮していただきたい。 ・関西圏の保管コスト高騰を背景に、四国の倉庫需要が生まれており、コストメリットを踏まえた港湾用地の活用策を検討すべき。 ・関西国際空港からのアクセスが悪く、海外からの出張者が四国（徳島）を訪問先から外す傾向が顕著になっており、海路を活用した関空へのアクセス改善や、徳島で車を停めて関空へ向かうパークアンドライドのような仕組みができれば、自然と人が集まり、地域全体の産業振興に繋がる。
学識経験者	・歴史的に港はまちの形成を支えてきた拠点であり、その将来像を見据えることは都市計画上也重要。 ・自動運転やシェアライドなど、交通分野で様々な変革が起きており、将来の姿が見えづらくなっている。港湾物流においても、陸上側のトラックの自動化などの新しい動きとどのように連携し、あるいは競争していくかを見据えて、港が担うべき新たな需要を検討する必要がある。 ・港の将来需要が読みにくい状況にあり、インフラ整備には必ず時間がかかるため、複数シナリオを前提に、柔軟性を持った構想になることが望ましい。計画策定後の定期的な振り返り・柔軟に変更できる仕組みを構想に盛り込むことが重要。 ・徳島県総合計画・関係自治体の都市計画と連動し、整合性を保ちながら進めていただきたい。 ・「新しい人流の創出」と同時に、現在徳島に住んでいる県民が魅力に感じている豊かな自然環境や居住環境をどう守り活かすかという視点も不可欠。 ・南海トラフ地震の津波による堆積物、漂流物、火災リスクの最新シミュレーション技術を活用して、施設整備計画の参考にしてほしい。 ・南海トラフ地震については、ハード対策だけでなく、震災後の港湾背後地を含めた港湾の「事前復興まちづくり」の視点が必要。 ・県民アンケートの結果を見ると、徳島小松島港のイメージに突出した悪印象はないものの、突出した高評価もない。長期構想の中で、港が「県の宝」として県民からより高く評価され、徳島の発展・活性化の原動力となるような魅力向上の取り組みを検討していく必要がある。 ・大神子、金磯弁財天のほか、小松島のあいさい緑地の人工干潟にも豊かな生物生態系を持つ場所がある。現在の自然環境を評価した上で、重要な箇所を保存していく視点も必要。 ・県民に港への親しみを持ってもらうよう、港で行っている自然環境への取組を目に見える形でPRし、関心を高める仕組みづくりが必要。

行政機関	・まず長期構想の根幹となる「理念」を定め、それに基づいて骨子を構築する進め方が望ましい。 ・企業用地の不足について、具体的に「どれだけ足りないのか」「どのように使うのか」を定量的に把握・試算する必要がある。 ・クルーズ船の対応について、専用バースの新規整備により1箇所に集約するのか、複数の既存バースを活用して分散させるのか、方向性を決める必要がある。 ・南海フェリーの事業撤退について、現在は新たな事業者による航路維持を基本方針とし、関係自治体と連携して可能性を模索している状況。将来的に航路が「存続する前提」か「ない前提」かにより、港湾計画の描き方が大きく変わる。 ・木材系以外のバルク貨物の課題についても精査が必要。 ・トラックドライバーの時間外労働規制に係る陸上輸送のひっ迫により、大量輸送が可能で安定的な「海上輸送」へのモーダルシフトが急務。徳島の農産品・製造業の産業発展のため、モーダルシフトを後押しする港湾インフラ整備を積極的に推進していただきたい。 ・貿易港としての機能強化を意識し、「コンテナ取扱量の増加」に直結するような港湾計画の議論が必要。 ・現在、外航クルーズ船の受入れでは、貨物専用埠頭を臨時的に活用してテント対応等しているが、物流に影響を及ぼし得る点が課題。 ・木材専用インフラが各地区に残存しており、既存インフラを時代に合わせて有効活用する方を議論する必要がある。 ・徳島市中心部から万代ふ頭を通して港へ至る人の流れの創出（ウォークアブルなまちづくり）を推進しており、港湾と市街地が一体となったまちづくりを継続していくことが重要。 ・小松島市本港地区の「みなとまちづくり基本構想」と歩調を合わせ、賑わい空間への発展を目指す。 ・港を起点として、県内の観光地や中心市街地、スポーツ・文化施設を結びつける回遊性の向上を計画に盛り込んでいただきたい。 ・インバウンド需要を取り込み徳島への誘客を強化するため、観光交流のゲートウェイとしての位置づけを長期構想に明記し、乗客の県内観光周遊に向けたアクセス向上・おもてなし空間を確保することが重要。 ・万代中央ふ頭エリアでのにぎわい創出の成功事例を港湾エリア全体に広げ、係留施設再整備と組み合わせ、プレジャーボートの景観そのものを観光資源化し、周辺の飲食・物産・釣り公園等と一体的に整備することで、徳島の水都としての魅力を最大化することが重要。 ・バッテリーバレイ構想（蓄電池関連産業）が国の日本成長戦略 17 戦略分野に明記された。大型船舶対応岸壁・クレーン等設備の整備、アクセス道路の整備、企業用地の確保などが企業からの具体的なニーズとして挙げられている。 ・津田の岸壁(-10m)は1隻しか接岸できないため、沖待ちが発生している。また、規格が小さく、老朽化もしており、バイオマス発電関連の船舶への対応が必要。 ・津田地区は農林水産物の輸出拠点としての活用の可能性も期待でき、高速道路の延伸も見据え、水面貯木場を埋め立てて、新たな物流用地として活用すべき。 ・漁業環境への十分な配慮も願います。
------	--

③その他

事務局から今後の予定等について説明

6) 閉会